

博士論文要旨

ハンナ・アレントの「私的領域」論 —「共通世界」の安定的な存立を保障する思想として再構成する—

立命館大学大学院 社会学研究科
応用社会学専攻 博士課程後期課程
イノウエ タツロウ
井上 達郎

本研究の主題は、20世紀の政治・社会思想史における独創的な思想家として注目されてきたドイツ系ユダヤ人女性思想家ハンナ・アレント (Hannah Arendt: 1906~75) の「私的領域 (private realm)」論を考察することである。その目的は、従来のアレント研究において看過されてきたアレント思想における「私的領域」概念の積極的な存立意義を解明し、彼女の「私的領域」論を「共通世界 (common world)」の安定的な存立を保障する思想として再構成することを通して、アレント研究における新たな解釈視点の所在を提示することである。

アレント研究において、彼女の「私的領域」論に着目する理由としては次の三点が挙げられる。第一に挙げられるのは、アレントの「私的領域」論に着目した先行研究の不足である。研究史を概観することで浮かび上がるのは、アレント研究における主要な研究動向が、彼女の思想に位置づけられた「私的領域」概念の存立意義を看過したうえで、専ら彼女の公共性論の解釈をめぐる展開してきたという経緯である。第二に挙げられるのは、研究史におけるアレントの公私区分論に対する通説的解釈の影響力とその問題である。この解釈では、アレント公私区分論の顕著な特徴が、「私的領域」に対する「公的領域」の優位性と両者の排他的関係性の強調にあると指摘されてきたが、このような解釈は、アレント思想における「私的領域」概念の積極的な存立意義を看過した一面的な理解であると言わざるをえない。第三に挙げられるのは、アレントの「私的領域」論をその肯定的で積極的な存立意義に着目して考察することで、「私的領域」概念が有する「世界的」性格を明晰に把握することが可能になるということである。アレントが「私的領域」に肯定的かつ積極的な存立意義を認めるのは、彼女の思想において「私的領域」とは、「世界」の中で生きる人間の生に固有の尊厳や能動性を育むことで「共通世界」の安定的な存立を支える生活空間として位置づけられているからである。本研究では、先行研究の批判的検討を踏まえたうえで、アレントの「私的領域」論をその積極的な存立意義のもとで捉え直すための基軸的論点として、(1)「私有財産」論、(2)「全体主義」論ならびに「道徳哲学」論、(3)「子どもの教育」論、の三点を設定し考察を試みた。アレントの「私的領域」論を、これら三点の主題に着目して再構成すると、「人間の条件」をめぐる、言わば「共通世界」の安定的な存立を保障する思想と呼ぶべき彼女独自の洞察が明瞭に浮上してくるのである。

「私有財産」論の考察を通して明らかになるのは、「四つの壁」として隠喩的に表現された「防護壁」としての「私有財産」に守られることで、「私的領域」とは、人間が安心して「住まう」ことができる「世界の中の住処」として積極的な存立意義を持つということである。「防護壁」としての「私有財産」は、公権力の恣意的な介入や、社会の画一的な価値評価、さらには見知らぬ他者の好奇の眼差しといった「世界の公的側面」からもたらされる様々な脅威を遮断することで、「私的領域」の存立を保護するものである。ここには、私的に所有することが許された「隠された」空間を持つことが保障されてこそ、人間は「世界」の中で「人間らしく」生き

ることができるという、「人間の条件」をめぐる彼女の洞察が看取できるのである。

「全体主義」論ならびに「道徳哲学」論の考察を通して明らかになるのは、「私的領域」とは、家庭生活の領域や親密圏とも概念的に区別された、「思考する個人」という「道徳的人格」が涵養されうる「個人的なもの」の在処として積極的な存立意義を持つということである。アレントは、「全体主義」批判として提起した「私的領域」論を、後年の道徳哲学論で思想的に深化させ、全体主義に対する「政治的」抵抗に先立つ「個人的」抵抗の一形態として現れる体制への個人的な「不服従」の意義について考察している。その際彼女が強調したのは、公的な世界から退きこもり、「思考」を「始める」ことで、「自己」とともに誠実に生きることを意志する「個人」が涵養されうる空間としての「私的領域」の意義であった。アレントは、「思考する個人」の在処としての「私的領域」の存立に、政治的な危機状況のもとでの「人間の尊厳」の所在を見出そうとしたのである。

「子どもの教育」をめぐるアレントの考察を通して明らかになるのは、「私的領域」とは、子どもの成長と発達のために必要な基本的条件を保障するとともに、「共通世界を新しくする使命」を担う将来の「市民」である子どもの能動性を育成するための庇護的空間として積極的な存立意義を持つということである。彼女が教育を通して守ろうとしたのは、「世界」を「更新」してゆく子どもの能動性であり、それと同時に、子どもたちによる不断の「更新」を伴うことで可能となる、「人間社会」としての「共通世界」の活力に満ちた持続的存立であった。アレントのいわゆる「保守的」教育論は、異なる世代の人間たちによる「共有」と「更新」を通じた「共通世界」の持続的存立という、彼女の政治思想における中心的論点と深く関連する重要な論点なのである。

本研究における一連の考察を通じて明らかになるのは、専ら「公的領域」と「私的領域」の「断絶」のみを強調し、後者を前者の「欠如態」と見なすことで、「私的領域」の積極的な存立意義を看過してきた研究史上の諸解釈とは異なり、アレント思想において「私的領域」とは、「新しい始まり」としての人間の「自由」が発現する舞台である「共通世界」の安定的な存立を支える不可欠の条件として、肯定的で積極的な存立意義のもとで捉え直すことができるということである。アレント思想研究において、彼女が提起した「政治」概念の豊かな思想的含意を再考するためには、彼女の「公共性」論の精緻な解釈とともに、「共通世界」の安定的な存立を保障する思想として肯定的かつ積極的な存立意義のもとで捉え直される「私的領域」論の総体的な解明という論点を研究史上の重要論点として位置づける必要がある。このように、アレント思想における「私的領域」概念の積極的な存立意義を解明することで、彼女の「私的領域」論を、「共通世界」の安定的な存立を保障する思想として再構成することで、アレント思想研究における新たな解釈視点の所在を提示した点に、本研究の学説史的意義があると言える。

アレントが「私的領域」論で提起した、近代社会における「私的領域」の「剥奪」や「荒廃」という問題は、現代社会において一層深刻な様相を呈しつつあると言える。世界各地で続発する内戦や紛争に伴う難民の増大、市場経済のグローバル化の進展に伴う格差や貧困の拡大再生産、みずからを「無用」で「余計な」存在だと感じる人びとの間に広がる社会病理的現象の蔓延など、現代社会が直面する危機的な問題状況の背景には、人間が安心して生活を営むことができる空間としての「私的領域」が、暴力的な収奪や破壊、際限のない縮小や解体のプロセスに直面し、存立の危機に曝されているという問題が伏在している。人間が「自由」であるための根本的条件とは、安心して生活を営むことのできる「世界の中の住処」としての「私的領域」の安定的な存立に賭けられているというアレントの「私的領域」論が示唆する思想的洞察から学び、現代社会の諸条件のもとで「私的領域」の存立を保障するための方途を問うことは、現在多様な形態をとって進行している「私的領域」の「剥奪」や「荒廃」という問題状況と批判的に対峙するうえで、優れて現代的な意義を持った主題だと言えるのである。